

# 論 説

## これからの工業技術教育に期待する

市光工業株式会社  
職業訓練校 校長 藤田 順一

### 1. はじめに

私がこの原稿を書かせていただくきっかけは、(株)マルトー相談役の仁平様との出会いであった。企業から見た工業技術教育についての意見を求められ、私なりの意見を申し上げていたのがきっかけで、今回の原稿を書かせていただくことになった。

つたない私の経験がどれ程、皆様のお役に立つかわからないが、日頃心掛けていることや、思い、経験したことなどを含め書いてみたいと思う。

先ずは、教育の内容がああだこうだと言うことよりも、学ぶ目的は何か、自分自身が学びを通じてどんなことをしたいのか、人生の夢や目的を持って学ぶ大切さを教えることが必要だと思っている。そんな所を書き出しのスタートにして進めて行きたいと思う。

### 2. 学ぶ目的

学校で知識(技術)や技能を学ぶ前に何のため

に学ぶのかということを一一人ひとりに自覚させることが大切で、自ら学び取れるようになれば、言われなくとも自ら真剣に学ぶようになり、本人も先生も楽に楽しく学び、教えることが出来る様になると思う。

- 1) 学ぶことは、人生の目的や夢を実現するために必ず必要なことである。
- 2) 知識(技術)技能をしっかりと学ぶことは、良い仕事、良いものづくりに繋がり、社会の役に立ち、国を豊かにしていき、ひいては自分を豊かにすることになる。
- 3) 学ぶことは、財産を貯めることである。それも一夜にしては貯まらない財産(知識や技能、態度、人間関係、体力など)である。お金は宝くじがうまく当たれば、一夜にして億万長者になることもあり得るが、上述の財産は一夜にしては貯まらない。

例えば、聞いても分からない人のところへは聞きに行かないし、頼んでも出来ない人のところへは頼みに行かない。つまりは、上述の様な財産が少ない貧乏な人の所へは人は集まらないのである。

### 3. 学ぶ目的への取り組みの一例

当社には、職業能力開発促進法に基づく認定校として、市光工業職業訓練校がある。

高卒で、学科は問わず、入校試験に合格した者を1年間、知識や技能教育を通し、社会人、組織人としての自覚をもたせ、会社の将来を担う現場の監督者及び基幹技能者として育成することを図っている。私が、校長として一番大切にしていることは、自らが自覚し、夢や目的を持って如何に学び取ってくれる様にするかということである。

それは夢や目的がある時には、必死に学び、必死に行動(努力)するからである。その為の動機付けの一環として、社会の授業を私が担当しているが、社会といっても人として、社会人として、組織人としてどの様に生きるかということを考えさせ、自覚させるための内容で、その一例として、諺に「時は金なり」とあるが、私は「時は命なり」であると思っている。仕事を通じて人生が確立されて行く事を時間軸で捉えて、定年60歳とした時に高卒(18歳)で働き始め

ると42年間働くことになる。その42年を当社の現在の稼働日数と休日日数から大きく分けて、下記の表の様にして、人生と仕事のかかわりの大切さを学生とやり取りしながら考えさせたり、学生から社会人になるにあたり、自立して生きるということをもう一度真剣に考えさせる為に、四肢切断でも生き抜いた「中村久子先生の一生」の本を輪読させ感想を言わせたり、「君たちはどう生きるか」の本を読ませ感想文を書かせて、互いに発表させたりと、色々な取り組みをしながら、自分の人生は自分で真剣に考え自分自身で確立していくのだということを社会の時間を使って指導している。

「仕事と取り組むことは、人生と取り組むことである」が、私の思いである。

書きたいことは、まだまだたくさんあるが、紙幅の関係上次に進めたいと思う。

分けることは、分かることに繋がると言われるが、下のように表にして分けてみると人生の時間が見えて来る。

\*働くことを時間軸で考えてみよう。

一日を大きく3つに分けてみる。 ①睡眠時間 ②会社(仕事)時間 ③余暇時間

・当社の現稼働日数 244日 ・休日日数 121日

項目	1日(H)	1年(H)	42年(H)	42年(日)	42年(年)
睡眠時間	7H	2,555H	107,310H	4,471日	12.3年
会社(仕事) (仕度、通勤時間含む)	12H	2,928H	122,976H	5,124日	14.0年
余暇時間(平日)	5H	1,220H	51,240H	2,135日	5.8年
余暇時間(休日)	17H	2,057H	86,394H	3,600日	9.9年
合計		8,760H	367,920H	15,330日	42年

## 4. 時代背景

これからの工業技術教育を考えるにあたり、工業技術の時代の変遷を振り返って見ると、戦後の復活と繁栄を目指して、先輩達は先進国に追いつけ追い越せで、ものづくりに没頭し、活気と情熱に溢れてものづくりをしていた。その結果、東京オリンピック(1964年)以降の日本の高度成長ぶりは目を見張るものがあり、大量生産、大量消費の経済大国日本となり、時代とともに諸外国からはエコノミックアニマルと言われながらも、人々の暮らしは豊かになって、巷にもものが溢れる時代になった。

## 5. 創る(作る)時代から使う時代へ

戦後の復活を目指している時は、国民全体がものを作る方向へ目が向き自然に作る行動へと結びついてきたものが、大量生産に伴い、色々と便利なものが安く手に入るようになり、何時しか意識が使う方へ移っていて、使うことは上手になったが、作ることは苦手になってきている。

私の子供の頃は、遊び道具は自分で考えて作り、自然の山や川に行って工夫して遊んでいた。しかし、今はお金を出せば大抵のものは買えるので、それを如何に使いこなせるかが重要になってきている。端的な例が携帯電話で、若い人達は、いとも簡単に色々な機能を使いこなしているが、一般的には、年輩者の使い方は電話かメール程度である。

時代背景もあるが、作る時代から、使う時代になっている。

## 6. ものづくりの意識変化

2007年度問題(団塊の世代)がクローズアップ

されてきた昨今であるが、振り返ってみると、高度成長に伴い大量生産、大量消費となり、ものづくりの意識、方法が機械中心のものづくりとなり、『機械(が)作る』つまり機械が中心で、人が機械に使われる状況が続いたが故に『機械(で)作る』つまり人が中心で、機械を使って人がものをつくる技術・技能の意識が薄れてきた気がする。たかが『が』か『で』の一字の違いであるが、そんな些細な意識が日本のものづくりを危うくしてきたのだと思う。団塊の世代がリタイアの時期になり、企業では、技術・技能伝承の取り組みが、あちこちで行なわれているが、一朝一夕にはいかないのが現状の様思う。私は、「良いものは人が育てて出来るもの」と思っている。そんな思いで、毎週書いている、今週の言葉の一つ「物づくり」を記しておく。

### 『物づくり』

物は人の営みに欠かせない

物は人が作るものが使うもの

物は買った人や使った人が

喜び感動し 満足する物でなければ本物ではない

故に物づくりは人づくりである

自ら語らずとも語る物づくり

物にももの言わせる物づくり

そんな物づくりが出来たとき

本物の物づくりとなる

## 7. 教育の変化

高度成長に伴い、経済的に豊かになるにつれて、高学歴化が進み知識偏重になり、技能(わざの能力)は置き去りになってきた気がする。知識以上の知恵は出ないので、学ぶ事は大切ではあるが、頭だけ(知識=技術)でも、身体だけ(技能)でもダメである。

知識はその人の頭の中にあるだけで、社会や

企業では結果として「もの」の出来ばえがどうであるかが問われる。つまりは、製品であったり、文書であったり、形であったりなど他人から見て分かる良い「もの」でなければならぬからである。

グローバル競争の時代において、知識と技能の最大能力を発揮させるには、掛け算の能力でなければ、競争に勝てない。故に知識(技術)と技能の総合能力が10とすると、

知識(技術)×技能				
5	×	5	= 25	*知識と技能の値が、5×5の時に最大能力になる。したがって、能力バランスが大切だと思う。車でもタイヤのサイズが違えば真直ぐ走れない。
6	×	4	= 24	
4	×	6	= 24	

上記の様に考えると、今後の技術教育は知識偏重の教育で良いのかと疑問を感じるころはある。

しかし、そう簡単に変えられるものでもなく、変わるものでもないと思うので、先生方の教育に対する情熱に期待するところ大である。

企業においては、後工程はお客様と心得て仕事をしろと口うるさく言われる。言い換えれば、先生のお客様は学生である。お店(教室)は開店していて、お客(学生)は入って来るが、商品(授業内容)を誰も買ってくれなければ、お店(教室)は開店休業と同じである。

お店(教室)に学生は来るが、持ち帰るものが無かったら、教室というお店を開いていても意味がない。監督者教育(TWI-JI)の中に「相手が覚えていないのは、自分が教えなかったからだ」という一説がある。将来を担う学生にどの様に向き合うか、先生の役割は大きいと思う。故に先生の教育にかける情熱がこれからの工業技術を左右する大切な役割を担っていると思う。

そんな思いから、良い機会だったので、日頃自分で心掛けていることを私なりに「教育に対する情熱度自己チェック表」として作成してみた(次頁)。

## 8. 終わりに

私が現場でのものづくりから、訓練校、全社

の社員教育と、人づくりの場へ180度違った仕事になった時の戸惑いと模索の中から分かったことは、ものづくりは、健康の上に立ち、その人の持つ知識、技能、やる気が世界一であれば、世界一のものづくりが出来るが、教育は知識、技能、やる気が世界一であっても、世界一の教育にはならないことである。それは受ける側の勝手に受け止めるからである。故に教育には、受講者の信頼に値する人格が大切であると気付いた。道具や機械は腕を磨いてくれるが、人格は磨いてくれない。人格は人によってしか磨かれないから、私も積極的に異業種交流をして、色々な方にお会いし、沢山のことを学ばせていただいている。そんな中から学んだことは、教える自分が育てば、学ぶ人が育つということである。

最後に先達の言葉を借りて終わりにしたいと思う。

1) 「教育とは、流れる水に筆で字を書く様に儂いものである。それでも岩壁に刻むような真剣さで取り組まなければならないのが教育だ」 森 信三氏

2) 「人を育てる」

環境が人を作るということに囚われてしまえば、人は単なる物、単なる機械になってしまう。人は環境を作るからして、そこに人間

の人間たる所以がある。自由がある。即ち主体性、創造性がある。だから、人物が偉大であればある程立派な環境を作る。人間が出来ないと環境に支配される。 安岡 正篤氏

上記の2つの言葉は、手帳に書いて自分の戒めの言葉としている。教育は、学びを通じて人生の夢や目的・目標を達成するのに必要なことだと自覚させることが、一番大切なことだと思

う。自覚すれば、自らが積極的に学び取るようになる。

最後になりましたが、このような機会を与えていただきました(株)マルトーの仁平様、実教出版様に心より感謝して、終わりにさせていただきます。

読んでいただいた方々に少しでもお役に立てば幸甚です。有難うございました。

教育に対する情熱度自己チェック表

No.	チェック項目	出来ている	ある程度出来ている	努力を要する
1	学生に接する時、何時も情熱を持って接しているか。			
2	授業内容をいつも工夫しているか。			
3	一方通行の授業をしていないか。			
4	学生中心の授業を心がけているか。			
5	絶えず学生の反応を見ながら授業を進めているか。			
6	授業後、学生に意見を聞いているか。			
7	学生に公平、公正に接しているか。			
8	テスト結果だけを重視してないか。			
9	絶えず学生の反応を見ながら授業を進めているか。			
10	何時も健康を心がけているか。(身体的・精神的・経済的)			
11	絶えず自己研鑽、自己反省に努めているか。			
12	学生が、何時も気楽に質問や指導を受けに来ているか。			
13	学生から、個人的に相談を受けることがあるか。			
14	絶えず世相をキャッチして、授業に反映しているか。			
15	毎回授業の理解度目標、到達目標を持って行なっているか。			

\*評価点 ・出来ている(3点)・ある程度出来ている(2点)・努力を要する(0点)

\*評価結果 ・40点以上(素晴らしい)・30点以上(よく努力をしている)

・20点以上(もう一步の努力を要する)・20点以下(相当の努力を要する)

【補足】

- ・森 信三著書
    - ・修身教授録 致知出版
  - ・安岡 正篤著書
    - ・運命を創る(プレジデント社)
    - ・百朝集(福村出版)
    - ・いかに生きべきか(致知出版)
    - ・人生の五計(PHP文庫)
    - ・人間としての成長(PHP文庫)
- その他著書多数あり。

- ・連絡先
  - 会社名：市光工業株式会社  
「自動車部品(ランプ、ミラー等)の製造」
  - 住 所：〒259-1192  
神奈川県伊勢原市板戸80番地
  - 電 話：0463-96-1453
  - F A X：0463-96-1454
  - E-mail：j-fuji@ichikoh.jp
  - URL <http://www.ichikoh.com/>

余談

一昨年暮れに起きたスマトラ沖地震の時にタイ・ピビ島へ旅行をしていて津波に会い九死に一生を得て無事帰って来ることが出来ました。

犠牲者を目の当たりにしながら、阿鼻叫喚の中で生きている有難さと、生きている者の責任を感じました。



津波直後の様子。右下が筆者。